價値の世界に就て

川端隆巖

既に吾等の人間世界に於て生起しつゝある如實の相は善の惡に對する、正の邪に對する、强の弱に對する、醜惡なる爭鬪であらう。殊に是等が利害關係を結び附ける時、人は多くの時内なる良心のさゝやきも自己自らの人格をも顧る事なく利是れ見ると云ふ塲合が多い樣である。かゝる傾向は上は政治問題より、勞働問題或は昨今やかましき地主對小作問題に現はれ吾等はそゞろ敎育なるものゝ實績に付いて疑を感ぜずには居られないのである。吾等は互に深く自分自身の事を考へて見なければならないと思ふ。どうも普通一般の吾々の考方は自分といふものをわきに置いて考へてゐることが多いのではなからうか。私は多くの塲合心の眼を外の方へそらしてゐることが多いと思てならぬ。知識と云へば自分を除いたもの、思想といへば自分自身の問題でなく他の問題にのみ關係してゐる樣に考へられる。私は今自分自らの相を振り返つて見たいと思ふ、如實の相を顧みて見たいと思ふのである。さて吾々の行住坐臥を顧みて見ると何一つとして或るあり難いものを中心として行はれざるものはないのである。行くも座るも悉く何等かの意味を持つてゐる。それは意識的であると無意識であるとを問はず、吾々の全行動は或る價値を中心として流れてゐる。先づ一國の國人として萬國さま〴〵の人々の

間にたち交りて、面目を保ち敢て他國人の下に立たず、壓迫を被らず獨立の一國人として立つことを得るはこれ國家の恩である。日常國家の裡に居るから其のあり難みを覺えぬが、たとへば一刻も空氣を離れたなら空氣の御蔭がすぐ知れる如く國を出たものは國のあり難みを知るであらう。その他すべて吾等の周圍はこの有難みを以て被れざるはないのである。然るに文物の開くこと已に久しき今日に至つては次第に慣れて其の有難さを餘りに感ぜぬのは自然の勢である。今日文明の德澤敎育の恩惠は唯少數の人の力ならずして無量の人の働きによつて或は國民的精神の相傳となり、或は人類の文化流布となり廣く地上萬有の感應の作用の賜である。獨り偉人のお蔭であるのでなくしてかのジョジエリオットの言つた樣に名もなき誰も今は訪ふものゝなき墓の下に眠れる田夫野人が忠實に此世を渡つたお蔭である。又自分が當然の道を履んで生活するのは世間一般の人に役立つて居るのである。かく人は互に相依りて生存して居る事實を綿密に觀察して吾人は全く人の力によりて生きてをるといふ眞理を釋尊は一切の男子はこれ我が父一切の女子はこれ我が母なりといつて居られるのである。

已上私は、吾々が價値の世界惠まれた世界に住んでゐることに就て述て見た、所がかく有難い世界に住んでゐる吾々も深く吾々の肉體的生活に立ち入つて直視したら如何なる相をなして居るであらうか吾々の肉體的生活は自然科學者に言はすれば新陳代謝でありこれが止まれば死であると。又吾々は生者必滅と言ふ。生あれば死あり。新陳代謝が行はる爲には舊きものは死せねばならぬ。時間的空間的

には限りあり、永久に老いざらんとするも不可能である。所が吾等は生命たるからには常住を求めて止まぬ。而も現在の身は遂に崩れる。此の矛盾を如何に突破するか。これが子孫の生産によつて常住を求めると言ふことになつた。而して此願を達せんとして、樣々の欲望は生れるのである。此の個別的な身を生き永らへる爲に食を求め衣を求め住を求める。人類の大部分はこの願の爲に衣食を求め營々としてその生涯を送つてゐる。勿論衣食住及異性を求める爲には金がゐる。世の人の大部分は肉の生命に基く金を得んとして働いてゐる。そして此の肉の生命の常住を維持せんとする種々の欲望に根ざすあり難きものを物質と言ひ富と言ふてゐる。而してこれ等物質的の價値を吾が身に實現する事は直接吾等の肉體に付いた美いもの即ち健康とか美とかゞ人に優れんとする爲である。

人は一人では住み得るものでない。即ち社會をなして互に惠みの世界に育ぐまれて行くのであるが。しかしその社會に於て如何なる人がその周圍の人から有難きものとせられつゝあるか、そは富ある人容貌の美しき人が即ち社會の名譽ある人となるのである。人類社會には物質的の價値が基となつて社會的の價値が生れてゐる。

かく見て來ると人は一面に價値即ちあり難き惠みの世界に終始してゐると共に、他面或る價値即ち富とか權力とか名譽等を得んとして努力してゐる。

若し人が唯此の肉體にのみ盡きるものなら、そしてその外に何物も殘らないならそれでよいであらう

從つて富をなす人權力ある人は一番賢い羨しい人達であらう。しかし古から今に至るまで、すべて吾等が眞實に崇める人々はそれを爲さなかつた。吾等が心から崇むべき人々は大道にその陋軀を曝して道を說いた釋迦でありキリストであり、ソクラテスである。吾等は決して權力富力を以て一世を靡かせる人を以てはしない。即ちこの魂の生命は肉體の生命に比すれば及びもつかないのである。これを吾々は普通に呼ぶ自我を捨てゝ無我の境地をあこがれるものでなからうか。

然らば何が故に靈の生命が肉體の生命よりも高いのであるか。多くの人達は精神的方面には眼がくれない。現代は富を集めたものが跋扈してゐる時代である。そして物質的價値のある者が常に精神的價値のあるものゝ頭を抑へてゐる。それであるから物質的價値の方が精神的價値よりも上ではないかと考へるかも知れない。しかしそれは間違つてゐる。

次にそれに就て考へるならば先づ容貌の美しき事、健康な事は誰しも願ふ所である。そは明かに人々の價値となつてゐる。しかし果してそれらの價値は純粹にあり難いものであらうか。いゝ加減なものであるか。之れを考へる必要がある。若し純粹によいものであるならば何日迄も惡くはならぬ筈である。純粹によいものは飽く迄よい筈である。然るに美も健康も遂には惡くなるものである。容貌の美しき爲に人を惑はし吾身をあやまらす。容姿の美なるが爲めに心の寶を積む事を怠る。健康なるが故に身體を亂用して身を破る。富めるが故に權力あるが故にその心おごり、心を汚すのみならず身體そ

のものまでも破つて了ふ。かく考へ來たる時それらの美や健康の價値は純粹によいものとは言へない惡くもなり得るものである。さらば何ものが美きものとして最後まで殘るべきであらうか。富にしろ權力にしろ名譽にしろ之を正しく用ふれば人々に幸福を與へ富も權力も名譽もよきものとなるであらう。然らばそれを正しく用ふるものは何か。それこそ正しい心でなからうか。心がそれ等を正しく用ふればそれ等は價値として殘るであらう。之を惡用すれば禍を殘すであらう。吾等はこれで精神的價値の物質的價値よりも更に大なるを知つた。

さてそれならばそれ等の心の德は果して最高のものであらうか。それ自身に純粹よいものであらうか此を吾々は考へる必要があらうと思ふ。

世には聰明、正義節制、勇敢、等の德を修める爲にその生命をさゝげる人々を見る。吾々はそれ等の人々を敬はないと言ふ譯でない。併し心の底からそれ等の人々に喜びを感ずるかと言へばそれは果してさうであらうか或はそれを敬遠するのでなからうか。何故かと云ふに少くともそんな氣持の起ると言ふのには、その德が未だ最高それ自身のものでない事を示すものであると思ふ。若し純粹によいものであるならば、吾等に於て湧躍歡喜を感ずべき筈ではないか。然らばこゝに再び私はそれ等の德に就て吟味しなくてはならぬ樣に至つた。

こゝに私は今一歩思索を深めて見たい。あの勇敢なる德は如何なる時にもよいものであるかと云ふに

決して然らず。むしろ惡い意味さへ含むのである。正義はあり難い德なれども正義なる故に風情を失ひ涙を失ひて鐵の如き心となりはしないであらうか。吾等は又かゝる人をあり難い人とは思はぬ。ある場合には憎惡の感じさへするものである。かく考へるとそれ等の德は必ずしもよいものとは言へない。さらば心についてほんとの寶は何か。善そのもの純粹そのものが寶であり得るだらうかそれはあり得る。然らばそは一體如何なるものであらう。

それは聰明、正氣節制、勇敢等の心德の上に超越して而もそれらの德をその各の所に振舞はしめる或る力である。それは吾々が言ふ悟りとも云ふべきものでなからうか。心の底に光つてゐる悟りそれによつて初めて心の諸德はその持てる本來の德に化する事なく。固定することなく如何なる時にも心の悟りは心の寶を生かして用ふるのである。かくて富も權力も生かされてあり難いものとなるのであるまいか。

これ迄私はあり難きもの卽ち價値の過程を辿つて來た、今それ等を調べて見ると一つは社會的價値二は物質的の價値三は精神的價値四は價値そのもの美そのものである。悟りである。

最後に私は一番有難い悟りに就て考へて見よう。此の世に尊きものは悟りである。これなくば他のあり難いものはいゝ加減のものとなる。カントが言つた樣に吾々の魂の特色は自發性であり、又そは本來の尊嚴を自立すとも言つてゐるが其處に魂の尊さがあるのでなからうか。吾等はすべて單なる外的

な機械的な壓迫を好まない。それは魂があるからである。限りなき生命の泉をその中に湛えてゐる魂こそ永遠の生命である。永遠なる生命は又やがて此の感覺世界の源である。此の世界は實に吾が中なる魂より迸り出たる結果である。カントは「それを考へること屢にして且つ長ければ長き程常に新にして增し來る感歎と崇敬とを以て心を充たすものが二つある。これは我が上なる星の輝く空とわが內なる道德律とである」と言ひしは決して彼が天地無限の擴がりとその廣大無邊の威力とに驚かされたのではあるまいと思ふ。又七百五十年の昔法然上人が淨土宗を開宗せられるに當つて「我たとひ死刑に行はれるともこの事云はずばあるべからず」との給ひて念佛弘通に御力をそゝがれしは必ずやわが生命がその念佛生活によつてやがてはあの光明世界に及ぶことを確信せられての感激の發露ではあるまいか。又日蓮上人は「たとひ王者に上すと言ふとも此の法華の行者たる事は止められぬ」とまで絕叫してゐられる。

已上吾等は吾等の靈の奧底には已に〳〵不滅なるものが立てられてあることを知つた。吾等は人間として生きたすべての努力をこれに傾けねばならぬ。吾等はこゝに脚を立てゝ初めて生きて行かねばならぬ。そしてこそ最もよきものを心に抱く事を得る。かく考へると如何に吾等の魂の價値は尊い高いものであらう。吾等の魂の底には全世界をも生み出す源泉があるのだ。而も現實には吾等の魂は外的世界に束縛せられてゐる。煩惱に惱まされてゐる。吾等の魂の本來の使命は此の世界を自由自在に支

配するにあるのである。所がお互は境遇によつて捕へられた。心ならずも引きづられて運命の奴隷となつてゐる。又お互に實際經驗するが如くに、吾等に加へられた運命は、たとひその一點すらも之を變更する事は不可能なのである。現代の大多數の人は苦しき運命のもとに生きてゐるのである。今日至る所に勞働運動小作爭議が起つてゐるも之が爲である。働けど〳〵生活は樂にならぬのである。外的の運命さへかくの如くに變更することは出來ぬ有樣である。まして心の上の束縛は一層困難な事である。第一にお互は各自に天分を以てゐる。而もこれを如何ともすることが出來ぬのである。かく魂本來の面目と現在の吾等のそれとの差は餘りに甚しきものである。さて吾等は如何に考ふべきであらうか。

若し人々の考へるが如く境遇とか天分とか言つた外的運命が全然外から加へられたものとするならば非常に悲しむべきものである。そしてそれに對する手段としては諦め(低級なる意味の)より外にはないのである。佛教で言ふ所の諦めはもつと高く朗なものである此の低級の意味の諦めは屈從である。心弱きものゝ諦めは屈從である。それに對し少しく意志の强き者は自暴自棄に陷る。それ自らを損ふ事である。諦めは精進もなく、向上もなくこれ永き自殺である。而して吾等にして此の運命を不改の外的束縛とするならば此の二つの道より外に取るべき方法はない。若し將して然りとせば人は幸に運の下に生れたものではない事になる。人間に取りては何等の希望もなくなつて了ふ。前途は冥々たる

闇に過ぎない。しかし吾等は魂の尊嚴を感ずる時多少ともあの純な魂に相通ずるものがなからうかと思はれる最高の源が光輝に滿ちたるものなりとするならば、此の世は如何に墮落しても絶對に闇とは思はれないのである。何時かは此の墮落のきづなを切つてあの朗かな光明の世界に行き得るものでなくてはならぬと思ふ。かく考へる爲には吾等の上に下された運命を他から加へられたものとは考へることは出來ない。そは佛敎で言ふ業報なのである。まことに運命は吾等には近い所丈しか見られない眼から見れば或ひは外的であるかも知れない。しかしそれは事實さうでない。運命は如何に悲しきものであらうともそは吾等の手の中にある。故に吾等はこれを拓く事を得るのである。生きる事によつてそれよりはよきものにすることを得る。勿論この考には靈と肉體と運命とを共にすべきでない。永遠の來世に迄も行くべきものなのである。不生不滅のものであるならば如何に墮落しても朗らかなものにあづかるべきものでなくてはならぬ。吾等の魂は土塊ではない。吾等は常に運命と戰つて行かねばならぬ。運命は魂それ自身に密接してゐるのだ。不幸なる運命に悲しむものは自らの過去の障りを慨くべきである。そしてそれは現在の健鬪により永久の努力によりて作りかへられ新しきものを生み出さしむる事を得る。かく考へれば此の生涯がかげろうの如きものでない事は明らかである。吾々の日常生活はその時きりのものでない。幻の如きものでない。かるが故にその行を愼み精進せなければならぬ。若し吾が行がその塲限りのものならばそれは大なる誤である。汝の行は永遠に向つて愧ねばなら

ぬ。又永遠に向つて行はねばならぬと。しかしこれは勿論無理な事である。若し今日が永劫の初まりであるならばそれでよいとも言へよう。さすれば今日一日の行を崇高に正しく行へば永遠にそれは實現するかも知れない。けれども悲しいかな吾等今日の行は今日に初つたものでない。永い〳〵過去のものである。今日の行は遠く過去のものであり又未來のものである。故に吾等は今日の行よりのがれることは出來ない。されば吾等の日常の行は實に萬量の意味があるのである。故におろそかに生くべきでない。然らば如何なる位地にあつて魂に(悟りに)至ることが出來るか。

先きに吾等の生命の底には常に永遠に對する憧れを持つてゐることを述べた。それは肉體的には異性に對する憧れである。しかし異性を得て成就する所は極めて僅かなるものである。そは子孫に對する肉體的常住に過ぎない。しかしそれは永久に常住なるものであらうか。此の世界も時々變化しつゝある。此の世界破解の時が何時かは來るであらう。さすれば肉體的常住は遂げられない。かゝる爲に吾等の尊い生命を捧ぐべきでない。吾等は現時流行思想たる愛の問題も今少し內省に立ち到らねばならんと思ふ。吾等の魂は不滅である。而もその魂の憧れの對象は肉體的のそれに比すべきもない。更に高いものである。それを吾等が性に對して生命を投げ出して了ふ事は悲しき事である。そは吾等の眼の未だ開けざるが爲である。しかし要するに不滅に生きんとする事は事實である。吾等は如何にして之を滿さねばならぬ。吾等の心の底には深く憧憬れるものがある。そは美に向つての憧憬れである。

而してその美に憧憬れる心は何か外に目的とするものがないであらうか。美しき人に憧憬れるのはその人との結合の目的である。精神的にも美を見て憧憬れるのは、その中に不滅で宿る事を感知するからである。かの儒牛の美學論にも「美を追ふ心は永遠に追ふ心である」と言つてゐる。これは何であらかう。美は一面感覺的のものである。それにも拘らずその美感覺を超えた常住なるものを吾等に與へるからである。風靜かなる夕方西の空を赤々と彩つて沈む夕陽の美しさを眺めその美しさ夕映の彼方に極樂を見たのもその崇高なる光景の中に超感的常住の世界を憶念したのである。永遠と言ふ事を考へて見るに、そは卽ち美を象徵したるものである。美の裏には不滅なるものを示してゐる、人々が美しきものを戀する心の裏には不滅なるものを思ふからである。しかし感覺にうつゝた美は美の相を宿すのみである。然るに人々はその美を透してその裏の永遠に觸れずしてその表面的な美にのみ執着して了ふ。吾等は更らに純な美へと進まねばならぬ。此の精神の爲には心の美へと進まねばならぬ。卽ち戀すべきも心の美はしき人を戀すべきである。しかし多くの人々はその心が天性よいと言ふのではなくその境遇に依つて變化する。本質的に美しき人々は境遇によつて變化を受けない。故に心の美も眞實の美ではない。更に〳〵吾等の心を美しくしてくれるものは自覺せる魂である。吾等は悟りある魂を戀すべきである。

けれども靈の美は依然美そのものとは言へない。若し吾等にしてこの美しき靈に執着して其處に沒頭

するならば吾等の精神は止む。美はしきものは美そのものに到らせねばならぬ。吾等の唱ふる念佛の眞實な意義も此處にあると思ふ。一度その境涯に至らんか、その裏には常住なる生命に至ることをうる。念佛そのもの純淨なる念佛そのものを把握する時初めて不滅を生むことが出來る。而して念佛そのものを抱くとはそはまことそのものであり。總てに優る價値あるものであり。最後のものである。こゝに初めて吾等の高きあこがれは癒やされる。それと共に吾等の生命は常住となる。而して念佛そのものゝ境界に至る事は甚だ困難なる事である。又人に語るべき事でもない。亦單に人に說くべきものでもなく、さうあらねばならぬ事であり、さう行はねばならぬ事である。即ち富貴も名譽も權力も肉體的快樂もすべてそれらは此價値の前には糞土の如きものである事を實證すべきである。かく言ふ時吾等の生命は初めて生甲斐あるものである。古來吾等の祖師と仰ぐ方々は皆かくして死んで行かれた。吾等も又かくして一日も早く心の鐵壁を開き眞實道を求めてやまぬ。

（一二、二、一稿）